

童蒙卷一草

初編



159.5
509
Vol 2

童蒙をく草卷の二

福澤諭吉 譯

第七章物事不心を留め機上臨を變お應むる事

世の中不行もる萬の物事を見て常不よく心を留むるは
自から我身を助るの方便を得べし人たる者の心得置く
べき事をハ悉く皆學校不於て學むんとし或ハ獨り書物を
見て二を知らんとするハ此も叶をざることあり故に我
鄰の人の氣質を知りて世界の事情を評し不し幾う異かき不
徒で風俗の同トからざるを考ふるなど數限もなき物事を

辨別して我身の用を達し世の爲を謀らんとするは日夜々我目の前不見へ我心小感するもろ小氣を付けて思慮を運らざらざるを

世の中の人の心ハ推察して斯る時ハ斯く思ふものなりと其情合ふ通ずることを心得居るときハ今我身小於ても斯く云ひ斯く爲まも何れハ他人ハこれを見聞して斯く思ふべしと預り先見を定め得べしことを人の機轉といふ人として機轉きりさきハ苟小も同類の人小交うを得も或ハ假令ハこも小交する人並の禮儀を尽るを知らず且又大切なる場合小差掛る人の機轉小由て大切を成ることも有り

平生より物事小心を留むる習性小ふは危き場合小臨て大ハ其功能を見しべし譬へハ漢者度守ふは平生より近邊の山の形を心小覺へ朝夕海が機轉雲霞の氣色を察して大風の時小預り難を適さし者少りとも又人の生涯の間ハ種種の難題小出逢ふて其取計小困ることも多し且平生よこ數限もたまき些細なる物事小觸れて胸の中小覺る許多しとハ其例を以て此度の難題をも首尾よく取計小を得べし斯ハ平生の心機宜しき者ハ否應の決斷小迫るも死も平氣小して難ざるものあり其時の機小應して施すべき方便を工夫するに甚き易し若し此方便を施して當らざる

ときハ次の上果を工夫し千變萬化窮すことなく所謂臨機應變の如ふ者といふべし抑臨機應變の才ハ人々の生付小由て優劣あり然るもとり別ハ心をも心を用て勉むハ次第の上達もべきものあり

いばせんち天文を語る事

べいこるがせんちハ佛蘭西の大學者あり生まて四歳の時既に読ふく書を讀み追々成長もふ不及び山不登野邊不出て日月又ハ星を眺るを以て樂とせし年七歳の時よ至てハまもなく天文を好む或ハ夜中俄不起て星月を眺るこふと聞ゆくといふ或夜同ト年頃の子供而三人と遊び

居たり折しも満月わきやきて昼の如く薄き浮雲風よ吹りきて月の邊を飛び雲の間ハ月走らぐ如く又月の前ハ雲動くが如く子供等ハこれを眺め彼の動くもつハ月狀雲狀とて争論を起し皆口々不動くものハ月あり雲ハ靜しして処を移さむといひけむハがせんちハ獨り説を定め月も動らざるハ何らさきとも其動くこと目不見る程ふるを今彼月の動くが如くふるハ全く雲の走り小由て斯く見ゆるかと云へど他の子供ハ其道理を聞分けを尚も銘々の説を云張けむがせんちハ工夫を運らしきらハ此方へ果給へて大木り下小連を行き其枝の間より窺えりハ不果し

て月ハ同一枝の間止めて動カを實不違る月のハ雲あり
事ウ片意地か子子供等も此證據を見てがせんちの説又聞
ロ一なりとつふ

③ 亞米利加之土人肉を盗まう事

北亞米利加之土人或日山より其小屋不歸り見をバ柱不
て千置き一肉を留ま中不盗まきたり土人ハ其場所リ換様
をよ取調べて盜人の詮索不出掛け森林の中を彼方此方
と徘徊する折柄熊犬不逢ふて尋る小今此邊不身の犬低き
年寄たる一人の白人ハ歐羅巴人程き銃炮を持ち尾の短き小
犬を連れて通行せざりやと以ひ事色バ如何不其通り

の人を見搦たりとの答不土人ハ悦び杖こを其人ハ我財の
肉を取も一盗人なり心よと速くハ行くと以ふ不熱犬等
ハこを怪し盜人不見覺の何るべき苦もなき不其人の有
様を斯くして委しく知り給ふハ何故なりやと尋けもバ土
人の云く我ハ立て肉を楓置き一不盗人ハ其下不石を積て
踏蓋を造り其犬の低きこと推て知る程一森の落葉の中
を見不其足跡の間狭し老人の微なり且其足少先を外の
方不踏出せるハ白人の微なり土人か見バ足を真直不踏む
苦なり又銃炮を立杖たる木の皮不筒口の腹あり一不其筒
の短きこと辨ふ一犬少小なきことハ足跡を見て知るべし

其尾の短きとハ埃ハ尾の形ヲ付きたるを見て知るべし
索
まらハ此犬ハ主人の盜もハ間尻を掃へ居たるべし

鼠王子を取事

前章の語ハ於てハ蠻野ノ民たハ亞米利加ノ主人と雖ども
よく物事ハ心を留るの徳を以て世ノ人の手本ハも爲るべ
しと例を示し又左ノ記モ鼠の語ハ其事柄を以て人間の
教と爲まハ非ざもども應機應變の例を顯てして人ハ示
るものなり

鼠ハ王子を好むものにて折々鳥屋を荒らるることあり鳥屋
の王子納失まることありも鼠の形を察するハ王子を待つ

べき事も何れも或ハ又こを口ハ啞へんとするも叶ふべ
きお何れも其の失を鼠の所作と思ふ者なくしてこを
ハ爲鼠ハ盜賊の惡名を道きハかきども其實ハ王子を盜取
ルハ相違ナリもんふもとやといふ處ハ一人の百姓ありて
度々鼠ハ王子を取らるとハ由テ或日其所作を見んとて靜
ハ鳥屋の地方ハ懸念待居たりハハ間もなく數更の鼠出で
來て其内の一疋王子の側ハ横倒も体を屈て腹の欠ハ王子
をハも自分の尾を口ハ啞へて腹と抱込もハ欠を外の鼠ニ
三疋ハて彼王子抱たり鼠の首筋を啞へて鳥屋より引出せ
しと見たり

に難船したる水夫の事

濱井ハ海邊小生を草多きども潮水の及ぶ処ハ出来ざ
るものなり或人唯此一事を心得居て危き場合ハ身を助け
たることあり

頃ハ千八百二十一年十一月佛蘭西の船一艘び以ちへどこ
つふ憂れて大風の為難船して乗組の人ハ盡く海に溺れ
其内唯四人傍の小き岩に泳上りたきども折しも夜ハ真
の暗くて方角も分からず且此岩ハ其鄰の岩の欠て海に落さ
るものと見へ水の面も出ること少ふ事ハ四人の者ハ
大小恐る今も大浪に巻込まんと生たる心地ハせざり

一ヶ一人の水支其岩小生た草を見れば濱井あり此草ハ
潮を被らざる濱地小生立者ありとの事を心得居たる由
て慌て其次弟を外の三人へ告げ一同安堵の思を為して樂
若を思ひ待居たも小翌朝不至もハ果して陸地近くして
助を得たりといふ

は畫工の召使其主人を助る事

せむむきとるふハ英吉利の名高き畫工ありとんとりふ
ふといふ大なる寺の圓天井の壁に繪を画くは高き處へ
足場を架て日々筆を揮ひし日或日自か其繪を眺め色々
不工夫を運らしりて覺へを知らむして少づ後の方不奇

て今一歩ふて足場の端より落んとする危き場合を傍ら居
 たる召使の者飛撲して止る暇もなく持合せ繪の具の皿を
 壁の繪に投げ付けたるに「おら」ハ大に怒り遽て繪の方へ
 進寄りこハ何事ぞ不届者と家来の罪を責んとし其舉動の
 次第を聞て更にお又驚き禮いふおら尚つくりつて深く
 其機轉を感すたうといふ押この時の有様を考ふるふこと
 なるが片足を外へ下し落んとする機小當りやと危しお
 ど色を拭けらるふに却て足の踏留を失ひ敷文の下敷
 石小身を碎くこと疑りけしをささば此時小差撲て其命を
 救ふの術ハ當人へ事の次第を知らしめを覺へを知らば自

けが足場の内の方へ逃げしむる所作を施す小在まわし
 故に主人の十平萬苦したる繪を其小汚せし其時の良策
 かりに際此判書を決断し其事を行ひ其機を失しき
 るハ腰力の強かりのといふへ臨機應變の妙なりもの

⑤ 十三歳の子供佛蘭西人を捕ふる事

千八百十一年の十月英佛合戦の時佛蘭西の巡邏の船のふ
 をおんえつらんどの海岸におびるに英吉利の
 小船を乗取り其乗組の者を心生捕ふて佛蘭西船を捕
 老人一人と十三歳の子供一人とを本の船に残し置き新小

佛蘭西の木夫六人を乗込ませて本國の港に此船を乗込て
 去りしと命たりか捕の船に八乗組八人おて佛蘭西船に
 別も後なるまといふ河口おて大風お逢ひしバ六人の
 佛蘭西人八固おて英吉利の老人も此邊の海の模様を知ら
 ず折しも夜、真の暗おて船中お油の貯りなき磁石を見て
 方角を定ることも叶らば船中の人ハ力を落しせん方もか
 くして唯風お吹きて漂ひしガ彼の子供ハ嘗て此邊を西三
 度航海して海洋の積標島山の形おとも心得しお由り嶋
 の烽火を見て不々もの河口おて成知り乃ら自かど舵を取
 てまらばもつねおふとひお思お乗込して英吉利の軍艦小

道舟を大音おて佛蘭西人を生捕さうと時お聲お懸て甲
 艦に兵士来り彼お人の佛蘭西人を捕へて小船ハ再び英
 吉利人の船お返せり
 第八章 謙遜を事
 何人お其の自分を譽り自分の事を大造お云ひ自負高慢を
 多し其の必世の人お突しりしゆのをおを故お入たるもの
 は自の多依り者と思ひ其言謙遜を事し謙遜を事し心欲
 くや事假令お他人お譽れずとも我身お於ては謙遜の謙
 意を忘るやが事を謙遜の身の徳の飾を事せり又謙遜を
 由り事を行へば徳義おり進むべし如何か美徳を備ふる

自ら負高慢の氣色を見るときは如て人の侮を受くべし
 若して況や内不智徳の實なくして外は自負の虚を飾る者
 をや唯是人の笑撃の所也虚飾を好む輩は忽ち人其笑
 を見るともふもて眞實は無智無徳と思ひてより更不基
 とき輕蔑を被さるべし又
 人皆我存寄を重んずる他人の説を輕んずるの弊あり
 巧を重んずるを慎まざれば人を我より劣ると思はるべし他人
 の説も不都合あるべしととも其本人が其説を是と
 思ふべし或は又我是とを言説も他人及び目かハ非を見らる
 ともゆらて我身一人と思ふ勿も諾も我身も世界中數十

百萬人の内の一人の我身自の我存寄を是と見る理
 何んや他人も亦自の我存寄を是と見る理何ん故
 人々も者亦亦心執るべき一事も我存寄も或ハ非あり人

假著なる爲の事

身の様を知らざり高慢して自かと思ふ我身の孔雀も及
 ぶよハ唯衣裳のみならず美りき衣裳だの物も孔雀の
 仲間の人より更不基支の初は初も亦十分高慢の心
 を抱き巧ら孔雀の相根を棄て身を飾り假著の装飾の成就
 一を孔雀の爲に別を告げ今日より我身は最早高慢の心を

して孔雀の仲間が遠入なりさきと其肉が實かき者か母
座を仰るべりくを假着の衣裳美ありと雖も元身の賤
き鳥あはれ外見を作る容体も何れ不都合して其偏怒ら
見お及び孔雀等は大お怒り彼相根を奪り利取り本の黒さ
鳥は為しを追放しけしと西若れ命はせん方重し其朋輩
離らんともをとも面目さく彼方此方おて痛く耻辱を蒙り
遂お身を容り、是を失ひしとゆふ

○ふさわくふうとんの事
古より學者大先生して由お教を尊まり人へ多くハ
人よりよく禮義を知り却て人お謙るものなり其吉利の

理學者一ふさわくふうとんをハ所謂大先生なり者おして
兼て又津遠梓謙の君子とゆふべき人物あり
幼年の時學問時を操々の細工物と作を見り人こを驚
かざり者なり「おうとん」ハ常ハ鎌倉金槌等色々の道具を貯
持して去きを用ひこと甚ど巧み其家の道知お麥の粉磨
る風車の子まを心「おうとん」毎時こを物物して其は武
をよく容察し其動く機をもよく容込て家お歸り兼て時持
の細工道具おて風車の雛形を作て其形ハお和真物の造
るおて最上の手際なり此雛形成就しを後政ハ心色を屋根
の土お是き風を受て車を廻し「政」ハ風を用て車を廻し

そこを工夫す其工夫の次第ハ車の輪の内を箱の如く
あけて上の方ハ麥米おど置き鼠を此箱の内ハまば鼠ハ
其麥を食ふんとし上ハ小屏ハ小從ひ其重さ小由て輪を廻
るを趣向なり

又或時友達より古き箱を貰ひこまを以て水時計を作せり
其仕掛ハ水を滴らして時を計る趣向なり箱の上の方ハ置
時計の地版の如きものを附けこま小時の敷を記し木の切
ふて時の針を作て水の滴り小由てこの針を廻るをサリハ
爲り此時計を自分の部屋ハ置き毎朝窓らぞして水を入
まよく時を誤ることおく家内の者およりとんの時計を見

此時を知す事との手際ありしゆありとんの部屋小ハ
此時計のまありしゆ四本の壁ハ鳥獸人船又ハ算術の圖を
を記し管木炭を以て綿密に画けり

追々年長しお及び大學校に入り學問を勉め空氣水沙時月
月星の事お読み知りまるとりお居るとて夫小力を用ひたり或
日獨り疾不出で腰拭居たり半死へ遇林檎の木より實の落
ちを見て独り自かた不審を起し此林檎の實の落さハ何故
なり哉實の内ハ落力力を備ふや哉或ハ地球ハ力有りて此
林檎を地球の方へ引けり哉と頗不思議を運らして遂に大
小發明せり其説ハ云々林檎を地面の方へ引くもハ地球

此引カハ天地の間不定なる法則にて萬の物を
 空中に飛去らしむることなく地球の面を止らしむる
 所以のものは物に夫々の量目ありし引力の所作なり
 故に或ハこれを重力とも名くと又云ハ天地の間の物ハ互
 お相引くの力ありて其力の強さと弱さとハ物の形や大き
 さとかなりと其隔の遠さと近さと小徒に割合あり故に月
 の体ハ大なりとも地球に較せば小なり然れ地球の引力不
 引くと遊星の体ハ月より大なるも日輪の引力不引り
 又此等ハ天体日月星各其居地と定りて運轉を為し互に相
 引くことなき互に相遠かりることなき引力の然らしむる

此引カハ天地の間不定なる法則にて萬の物を
 空中に飛去らしむることなく地球の面を止らしむる
 所以のものは物に夫々の量目ありし引力の所作なり
 故に或ハこれを重力とも名くと又云ハ天地の間の物ハ互
 お相引くの力ありて其力の強さと弱さとハ物の形や大き
 さとかなりと其隔の遠さと近さと小徒に割合あり故に月
 の体ハ大なりとも地球に較せば小なり然れ地球の引力不
 引くと遊星の体ハ月より大なるも日輪の引力不引り
 又此等ハ天体日月星各其居地と定りて運轉を為し互に相
 引くことなき互に相遠かりることなき引力の然らしむる

書物を残すを焼尽して多年辛苦の積も一時は灰煙となり
たもておしあはれんハ怒る氣色なく此大を撃つてきて云
く嗚呼たのやめん汝も不調法にたせども其不調法たる言
を知らざるなりと○ふりてんハ博く物を知り多く事を學
びたる人物を其學才不熟らざる常不人ハ謙して謙切
を尽し假令ひ賤しき身分の者ふてもこれを粗末不取扱ふ
ことわり固より其時代不於て天下の人物ふりてん右二
出づ者たしと雖ども其庭や死せんとも其時の言葉ふ云く
後生畏りく一余も今日しを學問の事を後世の人の學進
むべき知見不較へる固より見ざる足らざるなりと學を

好むを遺棄と介するといふ事ある一室小籠を
深く物事を考ふるより其食事の支度出来せども膳小籠
を或は三時を餘事お後しことありしといふ千七百二十
七年病小由て死せり年八十五歳あり
第九章禮儀の事
人々の心同一かたきせに我思ふまじのこを凡出五他人
へ告ぐかりも遠慮をすることなくは怒り喧嘩論争をなす
こと疑わしむを教ふ人ふ交ふ人ハ自か多顧て我心を取押
へ斯の如しせば他人の氣小逆ふことありしとよく前後
を考て先禮を奉劔を為るべきなり

世間の所合を教て人々の言語舉動小自うも定てなる式以
てて互に禮を重んじ深切を参まが如くせざる人おも同禮
へ一筆紙お入る遣をも先方の人へ全く他人おても世
小對して自分の姓名を記さず君の殿上き家来たる某と
書くを定式とて又先方の人をまさき敬ふ心ありと雖ども
慇懃の人お是れともお名宛そつて宛實き君と記すつて
うらむ以上日本の手紙は權右の如く唯長向お人を崇て身
を謙る不正直不似たとも粗暴の氣色を隠さんとも
小は是非とも斯くてさる處から君もさる所も君も
紙の表に粗暴の有様を丸出小記をさるゆへ先方の人へ

男おとこ女おんな會話の時ハ互に禮を盡して粗言を用ひを男子椅子を
取て婦人へ進め然る後のち小自わを椅子小就くを禮とを
人前ひとまへに小羽を掛 坐定まゐりまゐりて 互に相待て人より先小言を
渡わたせざるを禮とて人或は斯く儀式と好まき者多しと雖
どもこれを欠くや此ハ必を無禮小陷おとしるや早を小常つねに此禮
を勉めさるべくわを右の如く禮儀を勉るハ或ハ兩側小も
ゆるべきとも謹許つつして身の致終を仰るゆへ小て他人を怒
らしめざるを得るハ亦善からるや禮の本ハ仁あり人を愛
をさるの仁ありハ其人小對して禮を盡さし小可べけ人ひとや無益

の言語容貌を以て其人を怒らむ可まんや
 居ハ氣を怒るとハ古今の金言思さる可らむ我身の觸る
 所のハ小従て我氣がも變る所のなり喧嘩口論物馳ケ
 き中ハ居まじ死ハ我氣がも自の辱ケ一ハ荒一ハか
 のハ禮儀正一ハ言語柔なり中ハ居まじ死ハ我氣がも
 自の辱ケ一ハ知らざる禮儀正一ハかふるものなり禮儀正一ハ仲間
 小附合をれハ自の辱ケ我身の粗暴を制せんき力を得て次第
 二ハ小慣れ達ハ其慣ハ所性と為て生るハ禮儀正一
 主人の中ハかなハ
 禮儀の徳も他の諸徳の如く其小限かゝるハわを禮を尽

して介小過ぎ誦ハ諛さ小至る者ハ其見苦一ハこと禮を知
 らせしで粗暴ふる者ハ其から更故ハ過るハ諛さ小至る者
 及もさるも粗暴小至るハ其中道を得て男子の風を失えさ
 らものを真の禮儀とハ稱するなり

いへる一ハ百姓の事

人の位貴一と衆とも賤一ハ人の禮儀ハ感電するものなり
 人の位賤一と衆とも禮儀を盡せば譽を得べ一ハ抑人の重ん
 ぶる所のものハ禮儀の贈物ハもつを又其儀式ハもつを
 唯其禮儀の生る情合と禮儀を及も仕方の方さ一ハ所
 を悦ぶなり故小王公貴人大造ハ物を人亦與へて却て人

心の輝服を得ざること有り然る小見さかげも亦見賤しき
 者の禮儀を盡して些細の物を贈らば或ハ全人物を贈らざ
 るも其舉動のやさしき小由りて大い譽を得ること有り譬
 へハ英吉利の君第一世「チャーム」人小物を與へて惜む
 こと有り「と」食ども禮儀の法を知らざり「ト」中人を悦
 せしむること能わざり「ト」云ふ

往古べ「ト」やの國ふて或ハ百姓其國王「ハ」たきせりま
 の通行せらるるを見て何ハ物を進せたく思へども身小叶
 るさざるまゝ小傍の小川「ト」走て両手小水を掬ひこもを飲
 給へとて國王小歡りけむ「ト」玉も此奇ある贈物を見て可笑

ハ思たむむ其志を感して厚く禮を述べらるるなりさとも
 此百姓の容貌こを傲き下民ふもとも其心の美あるハ君子
 の人といふべし

英吉利の人ちやうせん小行き事

今より百年以前「ト」ハ英吉利の人も旅行せりこと今日の
 如く多うとぎむ他國ふても英人と云ふハ氣を併てこと
 を見しものかり頃ハ十七百年代の末或ハ英人伊太里小旅
 行して同國の都府ちやうせん小著し地々見物の折柄兵隊
 の通行に逢ひ立留てこもを賤居たり「ト」兵隊の内小若き
 士官一人以り路の傍小旅人の見物せむを見て身振を作ら

んとせしふや往來の満へ豆を踏外して其機小冠物を落
たもバ群集の見物人バこきを見て大に笑ひ旅人も定て可
笑く思ひしやんんと或ハ英人の方を見ら者もゆもしや案
小相違し此英人の顔色をも變へて冠物の轉り急
ぎこきを拾取も物静小禮儀を為して彼若き士官へ渡
たもバ士官ハ其舉動不驚さ亦面ハ付不てこも只受取り走
て本の行刑み加るし旅人も其場を過ぎたり此事小就て
ハ双方の間一言の言葉をも交えんと果とも心やうき深
切ら主トなる禮儀の舉動なきは誰かこれ不感せざるも
の何れハ彼士官屯所へ歸りて事の次第を隊長へ告げ言葉

を盡して旅人の所作を稱譽しけはハ隊長もこきを拾置き
難ししと惣大將不言エし乃ち斯くとも知らず英人ハ其夕
刺旅宿へ歸見もバ陸軍の副將本陣より使者とて來り彼
の英人を迎へ饗應せんとして待合居たり英人も望の外の事
ハ其意不任せ本陣不伴もて厚き取扱蒙り此より
英人の評判市中ハ流布して盛々の家ハ招待せられ出立の
時ハ方々への添書を貰ひ伊太里の國中を快く旅行したり
とつふ

抑此英人ハ格別富貴の人おもゆらざるも唯一時の愛情深
切少故を以て當時名高き伊太里の國中を旅行し至公大人

吾身の身ふも叶もささ取扱を受けしハ世ことを禮儀の徳
と云もささ可けんや

第十四世の事

佛蘭西國王第十四世のハ人君として申分あき人物ハ
ハ巧少さも仁心深き故を以て其舉動自ら真の禮儀
不適ふこと多し或日別殿にて家来の面々を召し酒宴を設
け櫻々の物語し給ふ折列坐の大座のまぐふくの君用事
巧て酒事の席を立ちけも其跡にて一坐の人へ仰せら
せけさハ唯今朕が語せし物語ハ面白からむし何れも退
服せしあらんとの上意ハ一言言葉を揃へ君の命の如く最

初め御話口もハ些相違のたせりと言上しけもハ玉の云く

さしあしん此物語の始末ハ今坐を立ちし時まぐふくが
父の身が差合ゆことあるを心付りて不圖話掛け
あちあちも前後を考ふも一時の物語を以て天晴國
家の用を為さべき人物小心を傷まらんよりも寧其物語
を消さんものと思ひ態を面白からぬやうお話したるふ

右ハ唯當坐の興小國王の以をせしことかきども其事柄の
始末を尋し決して滑稽お巧もを真の禮儀の趣意不適ふ
かのみいふ事

云ハも王ハ自ら多私ハ人を愚弄せしこと亦く又此事ハ付
 てハ王家の親族へも固く戒めて云く我等の身分を以て
 別々を尊卑ハ人を罵罵人を嘲けること亦くハ其物事ハ害
 を為しこと雷電の如く又毒矢の如くあるべしと○親王の
 典方ハ兼て惡む時ハ人何れ或日眞方ハ此人の次の間ハ居
 るを知らざれば又頗る謙里斯くも惡き男ハ見しこと亦くハ
 として次の間ハても聲の聞え不ど不何れけもハ國王此種
 を見て聲を怒らし目ハおきたてて云く朕ハ此男を國中第
 一流の人物と思ふ者少く此人ハ智勇兼備の良臣不て國家の
 干城ともハハべき者あるを妄不誑謗をさハ汝の罪許をく

云々も速し當人へ面會して粗忽の罪を訛まべしと

第十章 飲食を程取らむ事

人ハ老若の差別なく身体を健ふ力を強くせんが為ハ
 相應に食物を喰むさるべからず食物の量ハ人々同し
 身體の強壯あると虚弱あると不從て銘々不足する所の
 分量あり若し此分量を過て多く喰ふと必く害をかきこ
 る能くも又魚類肉類其外念入たる料理を何れも過分ハ喰
 むべりト平生斯く美味を喰て其分量ハ過るときハ必く
 病を別起下速ハ生涯の病身ハ陥ふこと何れ
 足も多し多し喰ふ者大食の人も名け音き料理を好む

者を美食の人と名く何人かては美食を貪り美食不耽て自
かり用心をもち能くさる者には正しき人ハこを以
て賤しまさかを得る食物ハ固より人ハ快きものなまは
能くこを喰ひ悦でこれを味ふハ當然の事なまは唯食
物の事小の用心を用て朝夕其料理ハ配ハ食物を以て人
間第一の樂しきものハ人たる者ハ不都合なる舉動と云ふ
一世の中ハ賤しむべき惡事多し其目途も亦何ハ不慮陋ハ絶て
さしめハ以て其目途も亦何ハ不慮陋ハ絶て
風韻の趣らとさまはこも不耽者ハ心む入り輕蔑を受け
ざらを得る

大食美食ハ惡事なまは尚こもさる甚たしきものなり酒
を飲む事即ち是なり何との時代ハや世の人酒を造ること
を發明して葡萄酒ぶらんちうのりき、おん、
酒等の種類なり多くこを用てハ身体ハ害を為ること
固より云ふを俟たを假令ハ程能く飲むも多少の害なきに
と能むを都て酒の中ハ何なるかるといハ精を含めり此
酒の精ハ人を酩酊せしめ人ハ精神を乱たり一時其人と
て癡狂の如くおちしむる毒藥あり世の人ハ酒を嗜む惡事
を為る者少かりしを酔の甚たしき人ハ癡狂の人を杖を
ふ至ることあり或ハ假令ハ僅をりても酒を用て其言

語應對へ常と違ひ馬鹿らしありて酔醒の後お手もて後
 悔もさむものあり故お少年の者ハ慎んで酒を飲むべからず
 一杯ハ二杯の手引となり二杯三杯違ふハ悪しき慣となり
 て自れ禁むべしとぞさ小至さべし酒を飲て飽くことを
 知らざらば者を潤風満又ハ大馬鹿者とも名し斯ハ馬鹿者ハ臨
 酢の時候令び大惡無道ハ舉動を為さずとも其氣分の慥ふ
 らざるハ疑もゆくと何程働かんともさ其働下たの慥を
 小若さとも世間の人も斯ハ不徳か酒客を頼りて事
 を任せんと思ふ者ふ一故お酒を飲むを為小人不見放まも
 職業を失ひ既お貧乏ふ其上お酒を買ふを為小錢を費

其貧乏ハ又貧乏を重ね一家内の者ハ隣むべき有様小
 至て誰一人とも其主人を親もこれを敬ぶ者もみく家内
 の難渋ハ云ふまでもみく還ハ貧乏病とて當人の壽命
 とも短くもさ小至さ小至さ

⑤ 二疋の蜜蜂の事 寓言

弥生の朝麗ら夕小く桃ハくもふい李ハ白く園小植た
 草花も今を盛小咲榮ふあり小二疋の蜜蜂ハ蜜を求めて飛
 來て花より花小移りて美味を嘗り其たのしき斜多き
 一ダ其一天ハ知恵ありて飲食を控餘もるを知て花の蜜を
 嘗る間ハ又其職を取て既小附け巢を作ら覺悟を

為せる小一疋の方ハ絶て心を用ひを唯一時の慈不引りさ
とて飽くまゝ蜜を嘗るのみあり
やがて桃の木ノ邊小至り其枝ハ廣口のびんヲ抵てたる
て其中を見とハ澤山小蜜の貯り
一疋の蜂ハ果て太食のこつぶをバ梳俾ありとてふを嘗
んとい彼の明徹の心付をも開入をも真倒小ありてびんの
中ハ這入り前後も傾きをりて獨り食を食まじり一個ハ用心
小用心を加へ試小一口ハ嘗たもとも災難の程も圖らをも
とて直小其処を去り又最前の花の間を徘徊し食を求めて
真小其味を嘗り日もちや西小傾うんともまバ彼らびんの

側小来りて其朋を呼び共小家小歸まべいと云へと答ふる
聲もなくびんの中ふてハ終日身体をも動きさをし又貯り
蜜を飽くまゝを嘗め腹小充滿しで最早一口も咽小通らをも
進亦其處を去ることも能くも其足も弱り其羽根も動り
を惣身の氣方衰へて進むも退くも自由ふらをも苦しさを
受て云く樂ハ身小快しと強どもこは不耽るときハ必を
身の滅亡を致すものありといひ終る命を落したり

ろいをころあろの事

ろいをころあろハへねーや國の貴族あり其時代世間の風
俗異しあろを交す所の友達も皆不行状あるハころあろも

此悪き友不^レ打交^レり飲食不^レ耽^レりて養生を知らむ始^レ終^レ腹痛熱
病痛風おとの病不^レ羅^レり一日として快^レしといふ日ハあり
て一ヶ年四十歳の時不^レ至^レり或る醫師不^レ異^レ見^レせらば始^レて幾
心して行状を改^レめ僅^レお一年を過ぎま^レして舊^レき持病も全^レ快
一又昔のころある不^レ巧^レも毎日の食物ハ半^レ二おん^レを限^レる
日方の名^レハを限^レり飲物ハ薄^レき葡萄酒十四おん^レを限^レる一
日の食物十二おん^レとハあり少^レきやうおはどもころあ
るハおま^レ不^レ由^レ稀^レなる長^レ壽を得^レたり年七十歳の時高^レき躰
より落^レて片腕と片足と不^レ怪^レ我^レせしことあり大抵この年
不^レて斯^レる大^レ怪^レ我^レを為^レせバ療^レ治^レハむづろ^レきすの^レ不^レて或^レハ

命も危^レかるべき苦^レなる不^レなるあり不^レ於^レてハ然^レらば兼^レて
身体不^レ申^レ分^レりた^レま^レハ及^レ度^レの^レ怪^レ我^レも直^レ不^レ平^レ愈^レし^レて旧^レの如
くあり八十三歳の時より山^レ不^レ登^レり馬^レ不^レ乘^レり或^レハ職^レ作^レの書
おと成^レ著^レ述^レして樂^レむけ^レ氣^レ力の盛^レなること推^レして知るべ
し其容貌いつも悦^レむ^レて死^レす^レた^レす^レても子供等と遊
戯^レむ^レ苟^レ不^レも心配の氣色あり九十八歳の時病^レ不^レ罹^レて何^レの苦
痛も不^レく往^レ生^レせしといふ

は おやくーむきんの事

おやくーむきんハ其^レ吉^レ判^レの不^レあるとあり^レをといふ所^レ不^レ巧
る造^レ船^レ場^レの職^レ人^レあり兼^レて大^レ酒^レを好^レむ男^レあり^レ其^レ家^レの貧^レ乏

おさも天然の報自分々勿論妻子を粗服粗食も有りつ
 かも其住居ハ樽陶土き裏店ありて世帯の道具とても
 るろふ一或は夜おやくハ酒飲明輩と共に市中をおとく
 行して不圖人の家不道入るハ遇然此家ハ禁酒社中の
 寄合有り其席小容貌温和ホ一々如何ホも重々一々見る人
 物一人坐を正しくして専ら大酒の害を述酒を飲まざり人
 の仕合ある有様を説き居たきハおやくも酔中とハ雖ども
 此口上を開き此様子を見て大ホ心は感ホ口上の終るを持
 て其社中ホ乞ひ已ガ姓名を記して禁酒の仲間ホ加さる
 たり

おやくの酒を禁せ一後朋輩の者ハ類てホこれを嘲り笑へ
 ども元来正直ある男ホも一度約束せ一こと後違へも酒
 席の方へハ足を向け毎日稽て得る所の錢ハ家の世帯
 不用の妻子も今八十ホ食物を得て暑さ寒さの心配ホ
 家の道具も次第ホ増一子供ハ學問所ホ入りて文字を習
 ふホ不ホ至まり次第ホ稼々ホ徒ホ少一了有餘の金も出
 来たホバこを始末して彼のせいのいんぐむんとて小
 金を預る兩替屋へ預け病氣の時の手當とホ一且又追々年
 の積るホ徒ホ働くことも叶てざるホ至らハ此金を以て老
 の身を養ふんとて生涯の覺悟を為せり

ゆふ小眠ふ今日不至るまで其味を知らざりしありと

第十一章養生の事

身体しんたいの健けんふふとの其諸道しよどう其申まを分わまく各定かくていりなり働こをは為なす
 をたふふ警けいの腸胃ちやうい小せうの自然じぜんの力ちからを備たもへて食物じよくと消化じゆわししんの
 臟ちやくと脈みやくの管かん小せうの中ちゆうをおくして血ちの運うん行かうをよくし肺はいの臟ちやく小
 脈みやくをくして血ちの中ちゆうをおくして氣きを通すしんの識しの枝えだを物めい度
 常じやう、身体しんたいの中ちゆうの變物へんぶつを蒸農じやう豆まめ等らう是こゝありふと只健けんふる有
 推おしとい上うへ右みぎ等らうの箇茶かんぢや小せう一いつとして中ちゆう分ぶんのとぎさ色いろは身体しんたい一いつ常
 不ふ快くわいくして何なにの苦痛くつうもおくし人ひと並ならの仕事しじを為すし差支さし支し小
 即すなはち是も人間にんげん第だい一いつの幸福しんぷあり若し然らざり者のこを不

幸さいの人ひとといふ人君きみ心こゝろを用もちて自みづから其身体しんたいの諸道しよどう其を守まも
 るとまり天てんの患うれれ由り謂ふを妻つまと生むふふとく其身みを
 安やす全ぜんふもく以得えべし唯ただ自みづから不養生ふじやうじやうを為すと自みづから災を
 招まねく者のこを如何いふしもをたかりまりあり警けいへは過かぎ分ぶん小
 物ものを喰ひ或は身体しんたいの為ため小せう宜よろしのとぎさる食物じよくを用もちるとたは
 必かなず腸胃ちやういの害がいを為す第一いつ過かぎ分ぶん小せう精しやう心しんを用もちひ心配はいをのこと
 多おほゆといは必かなず腦を害すし心こゝろの臟ちやくを傷めす上うへ身み体たいの腹はらをうた
 るとは紙小せう寒さむき風小せう雷かみをお怒おこり夜膚よの氣き孔くわうに出ること目
 子こ穴あなのうらこし七氣き孔くわうに出ることを寒さむき氣を止むは右みぎの如
 汁じゆをこのうらこし七氣き孔くわうに出ることを寒さむき氣を止むは右みぎの如
 く人の用もち心こゝろ宜よろしのとぎさる飲いん或は不ふ意いの怪けがれ小由よして身体しんたいの

諸道其を矯ひ其働を誤りてとつるは或病を名り重き病
小罪てハ死をる者少からずを故小人の身を達者小保たん
ともいふべ定むたる法則小授くざる可からむをこれを養生
の法といふ天より授けられたる身の力を保ち身の養生を為
さんか為小其道を學ひ其事を行ふ人たは者小大切なる
職あり
先祖の病を子孫へ遺し傳ふることありて是を遺傳病と名
り或一人の病毒を大勢の人へ傳へ及ぼすことありて是
を傳染病と名り傳染病ハ空氣あり風あり由て其病毒を知り
ことあり又ハ其病人に觸れて毒をうつることあり故小此

遺傳病傳染病小罪なる者の病を起したる本人小ハありざるも
ども其病の本を尋ねれば必ず是を造りたる罪人あり其
得を即ち遺傳病ハ人の父母たり者若くハ其先祖の不心
得りて此病毒を穢し子孫に傳へしものふまは其罪ハ先人
不在する所ハ傳染病ハ濕氣深き土地故又ハ大都會の内の隘
小穢き町に居り衣食住小不自由して何しき物を喰ひ家を
汚し身穢せし者より其源由を殺したるものあり
右の次第を以て考ふと人たは者ハ其當人の為小是るハ
勿論亦同類の人の為を思ふても身の養生を為さざる者
らを即ち是ま人間の勤勞が中を過す時病ハ生ずる

生む付き違者も人の身体を申分なく保たんとするふは
 左の箇条を守らざればならず也 ○住居の土地の高くは燥
 また五農を撰をざるべし ○家ハ清浄なり昼夜も
 空気の通をよくせざる可らず也 ○度々惣身を洗むる可
 けり也 ○毎日の食物ハ水物の外ハ二十四か先其日本ハ
 又七つてより少ふるべし此二十四は肉少
 くも三四杯んを魚類肉類を交へざるべし ○食物ハ
 かつも同一品のものを用品に用ひて去連亦一度の食事ハ
 たり多く少品を取揃て喰ふるべし ○焼酎は少く
 たり酒の類を過かば飲むべし ○毎朝一時飲少くも

家の外に出ても空気が汚らざる可らば身と心とも働を
 進歩爲す毎日の仕事ハ可らば仕事も間ハ一日ハ
 時乃至十時ありて一毎日期しく働きて其余の時ハ面白く心
 を樂ましむるべし ○湯もたも衣服ハ汗時も身ハ暑く可らば
 寒き隙間風吹通を家の内ハ汗時も止る可らば ○一昼
 二夜二十四時の内ハ木時乃至八時の間眠れ就く可し
 の時ハ其時ハ ○甚もどく心配せざるやう心を用ひ
 日本ハ幸す申す遣ふも氣分を張て二も不堪ゆへ ○世
 の人々皆よく此規則を守りてハ世界中ハ殆んど病の種を
 盡して人間ハ幸福ハ今日をもて思議をべからざるべし

も計を難くしむひけも、師の又も言葉盡しを云く決
て疑ひ多しなりを固より人たる者へ何患ふて如何なる災
難も逢ふも計を難くし難くも眼前の災難の来り奪も恐ろ
しむにハこそ成理けざり可らむ即ち是も人の職分あり此
職分を盡しを避くべき禍を避くべきに必きりも再び禍
を蒙りてきふりも夫ハ世界萬物を支配する為の法を設
け人の養生も天然の法なり今其計のころも不住居をよハ
天より定めたる法と破り罪もハ一家内の病ハ即ち其罪
の報ありと彼是理解し他報も遂に其言に従ひ速く不轉宅
たりけむ、其後良人の痛風も全快し數年の久しき小至

さまを一家内の病氣の沙汰あつても

③ 胃の病を療治したる申

英吉利の或湯治場や飲食不消化なる胃の病を療治せしと
て評判高き醫師のいさむせし此醫師ハ予き薬を用て珍ら
しき療治をもし不非き病人とありは飲食を扣へ家の外不
出で少しづつを身体の運動を為すしむる或時肥満し
たる中年の男この醫師の許に来りて身体め苦痛を訴へ療
治を乞ひけもハ醫師ハ其容体を見て忽ち悟り此病人ハ珍
らしむる例の金疝小て平生家を出ても馬車に乗る絶て
身を動かさざりし勝手次第に飲食も食ひし奢侈も増長せ

一者ありと獨り心小照頭きを病人小向ひ共工馬車小乗て
野邊小出浮てハ如何ヤと心小病人も同意しけきハ車小
用意してこま江載せ醫師自り手綱を執て市中を離れん
と五里ぞりりりり幾小至て誤て鞭を落しけきハ車を留て
病人へ鞭の鞭を拾ひ具せよとの頼小病人ハ何心小く車よ
と下りて鞭を拾ひ取らんとも其間小醫師ハ馬の頭を立
直して後の方へ駐出し突ひおが夕病人を振返り見えて徒
小て獨り歸せ給へ昼の食申ハ肯あるべしと云ひつゝ馬を
馳せて我家へ立歸へとなり此日より病人ハ次第小全快の
方小赴きしとぞ

又英吉利の都ろんとん小名高き醫師あり些風違ひの人物
小て世の人とも然奇人と称せり或日食傷したる病人との
醫師の家小至り療治を乞ひし小醫師ハ其脉をも察を何事
をも差圖せしめ病氣と何小ハ毎日六文をり儲けし仕
事して六文をりその物を飲も食ひせらるるしと云へ至此
口上ハ奇なる小似たきとも突小養生の極意小て人の守る
べき教あり

は若き男風を引きし事

若き男始て高貴小取扱りに或夜芝居より歸る途中小て風邪
小犯り其翌日床小臥して僅そつて藥おても用ひふハ全

快ききき苦あふ高賣の事此より一日の暇をも惜みて翌
日も店を出て其暮方、昨日よりも氣分悪くありたきども
兼て血氣烈しき若者おと尚もこをも恐をも又其翌日も
店を出て其咽喉ハ追々喉衝して痛を覺ゆども格別の事
とも思はれ其日も暮きて夜お入る馬車の屋根お乗て廻々
お行き高用を達せりこせより病症ハ次第お暮り聲も凄も
て難波をれども尚高賣お怖しくせし折柄或醫師用車より
て其店お至りたましく此男の様子を見てこハ容易おらぬ容
体ありこの儘捨置きおバ一命も危かきく一時お速く家
お歸りて療治し給ふべしといふは此男も不請ふりて家お

歸り様々お手當せし最中手後おて呼吸の管の頭より肺
の臓へ通る管をも膿を持ち建も養生の叶ふべきお何と
を二十日おりりの内お命を落し親類朋友寄集りて歎き悲
むと其とも史お其甲斐おけりといふ抑との男ハ性質可
愛らしく其行木ハ必も事を成まき見込める人物おそし
が唯養生の法お心を用以さるよりして不幸短命の死を致
せし悲る筈お事お何とぞや

第十二章自かち満足をもる事

自かち満足して足るを知るといふ事お作正しき満足と
正しからざる満足と二様の區別あり人の有様或ハ其身お

愉快からざるを云ふは、譬へば衣食其外の凶物不自由なる愉快より甚きことありきも、人ハ各知恵の働けり身体の働けりものおき、巴々知恵と身体と成以て此愉快おらざる有様を改めて、死方お赴くとするハ毫も妄ふる舉動おらざる斯る場合お至る自かた足るを知るおとて、其不自由不安んト何事を以て為さざるハ正しくらざる満足と云ふへ、又或ハ人として、眼前災難よせまざる、此とゆへ譬へば、蒸氣深き家お住居して、身体お害を受る欲入ハ、弊をたさ衣服を着て寒き思を為さ、如くこの場合合お至る容易く繕ひ得べき衣服をも繕ををして、自かた足

まらんとするハ、此亦正しくおとさる満足あり、開闢の始より世界中の人々、其ゆゑより不安んトて、自かたに足るなりと、一惡事災難の除くべきを除くべき堪忍お堪忍して、日を送る、一こともあらず今日の日お至るを、此地球ハ、蠻野の域おとすべし、
眞實の満足トハ、人々の才智と其身分とお相應を、有様不安んト我力を盡して、如何にもも、おとさる惡事災難を、お甘んトて、身お引受け、常よ心お懺り、死者を云ふ、即ち是を正しき満足あり、この満足ハ、人々美德おて、善人の常お心操る所、おとすを、世の人々も、成譽めざる者あり、

己の力を以て達すべき幸福を得る尚も満足を知るに
必す可なり。是れ名けて名利を貪む人といふ。世も名利を貪
む人あり。天運の然るにむす所にて或ハ世の爲み益を
爲すことあり。或とも其當人不於てハいつも満足せし
ことあり。眞実の幸福を味ふこと能はざるも一を與ふ見
ハ其二を欲し功名既ハ高きも更ハ尚高む人を好む死ハ
至るまで飽くことと知らざる者あり。往古歷山王諸國を征
伐して二を成押領し最早押領もなき國も盡きたりて涙
を流して歎息せしこと心も運を知らざるの不幸あり。位貴
しと雖も其家富むと雖もこれを見失ふの愚あり。或は得ざる

此心を堪んば事ハ暇あり。事ハ甚に甚ハ明哲ハ人間衣食住ハ物
を身ハ相應ハ未ハ自ら満足する者ハ其心常ハ安んず。身
身の悲あり。事ハ右ハ次第を以て考ふことハ容易ハ取除く
べき悪事を除くことハ事ハ甚に甚ハ不安んず。ハ満足ハ易きハ過
る者ハ其宜し。其所得を總て論じ。先ハ我ハ心ハ休ハ定ハ程ハ在ハ度ハ不從ハ満足ハ多ク
先ハ我ハ心ハ休ハ定ハ程ハ在ハ度ハ不從ハ満足ハ多ク
⑤ 黄金の玉子を生む鶯鳥の事
或人の家ハ毎日黄金の玉子を生む鶯鳥あり。主人ハこの幸
福を得て満足する。其苦あり。不却て貪欲ハ心ハ増し。毎日一
ブ玉子を取らん。其彼鶯鳥ハ腹を割き其無盡藏ハ開

元も多きと思ひまはぬ殺したる不唯一の王子を殺し大
 而望す夫の後悔したる多きも、
 一人の(3)青雲の志人不幸の事、
 へりくどんだまは英吉利王第三世(4)の時代、
 為すの國の政事を一手に握り功名青雲の大人も其威
 權甚と盛あも、國中の人々も宰相の力に依り幸福を得
 ず者多しと雖も宰相の身は於ては却て然るに七百年
 十五年十二月の晦日(5)おと元とんをいふと、
 訪ひ懐の談話、深夜更お及び翌早朝、
 主人の部屋へ入て見ると宰相は此度青雲の地を攻取て

英吉利の領土を為し印度の地方を護り事か付長々しき書
 面を讀み居たり當日ハ正月元旦の日にあはば、
 一應の事務して新年の初日を述べ當年も亦自出度君の
 幸福を祈りし、
 様子にて近年ハ何事去年よりも社會を閑たきものあり去
 年一年の其間ハ一日として愉快き日不逢たりと云つり
 右ハ宰相の心中より出し感慨あり傍らより觀て其身分
 を考ふに生涯の間思ふ事の成らざるハあり功名青雲の
 極度不達したる者不似たきとも其當人の身は於てハ尚こ
 の不足のりきき人の妻も名利を貪りて飽くこと知ら

女下野間毎毎を掃除して宵の酒宴の跡は舞臺一片も捨
 置かぬ跡は空しくありぬけり田舎鼠ハといきつき聲を出
 ても知らずく小主人お向ひ云ひけるハ君が住居の奇麗なる
 其地達の結構もさる斯く恐ろしき心配ハ迎も祭ハ地
 雖も田舎の小屋の粗食おて安く月日を送るら其身の生涯
 の氣樂なき安きかたきして何物をう羨まうと云ふん苦心
 何いで何物と云辭ありと云ふん最早御取賜もるくしとて
 早々田舎へ歸せしとて

②貧院の婦人満足せる事

或る貧院おむつとといへる婦人あり其身の今不安ん下目

加ふ満足甚々有様實本人の千弁ともかたきものあり
 抑このむつとの由来を尋ふといふけあき時より父母二難
 をもて叔母の家にお約ふとあり不自由なく養もれたる者あり
 此家ハ何れも貧しき暮しふのめりもさるも質素儉約を守
 るて一家内奢侈の跡を聞かぬ叔父の性質子供を愛し常
 にお其子世帯へ勤て操々の誼話を為さしむるも他人の
 身の上の事を噂し他人の家内の事を噂し他人の衣服の事
 を噂し他人の為成世帯の事を噂するハ固くとも以禁せり
 平生人お告て亦も他人の噂話ハ子供の子心を散々お打砕く
 りぬあり若しこそ禁禁せざりて朝夕人の噂の事を聞き人

貧院ふと名を驚きも世に非ざるも思ふを院ふ
入て一徳心唯一心天の慈を拜て信心を専し不自由を
堪忍して以つれ心を悦ましめ少年を教へ老人を憐し明堂
の者へ朝夕心得とあらずき事を談話して皆これを悦む
二者おし世の人々の貧院へ見物り為ふ来ふ者も何つじ
の様子を見て其身かろ賤しあふさを知て自分一人の決
断おもとざと貧院へ入てしもの心の程中慈心せざる者ハ
おろしとひよ

① 蝦蟇の仲間お君を立事高言

蝦蟇の仲間お共相政事の法を立てし河も満足するこ

とを知れ早も心変りて自主自由の風を厭ひ何と
て其政事の様を愛んむをと思ひ石土雷の神なる木星と
念し我仲間お王たる者を下し給へと祈りり
木星も厭て慈悲深き神あを成火け蝦蟇のたふ不災害
少あふ人こと思ひ一時の木の切を天の送りこれを
汝等の王不定むし此の命お由り蝦蟇等ハ大不悦びこの
木の切を王の位お奉り類りおにも敬び尊びし漸
くこそ不慣れ王の心意の溫和ふらぬ事此ことおしを最早
敬ふ心もふく次第おまをくし道づき遠ふハこも成悔り
斯の者ハ我仲間の王お為し置き難しをも更お又木星を請

伏別お王たる者を下し給へし願ひけり木星もこの度ハ
怒り給ひまじりて五位驚を遣りたり
五位驚ハ所々たるの城に不君と臨み位不即と其日より
配下や者を捕へてこそ成喰ひ大に國中を憐れしけり
城の難決ハ以前ハ百餘の思の外のことありしを又木
星の請へてこの度の王をも取替たりと歌願したるも
木星ハ最早ふの歌願の次第を聞入るも未だ云々汝等を訴
る所ハ難題ハもも汝等ハ無分別にて自れを招き一禍あり
に自れも堪忍とすよ他亦方便のくくもせと
第十三章 節約の事 自ら自由の用

人ハ衣食住の物を得るが為ハ働くハ勿論おととも唯働く
のしふてハ心まだ人間の事を終りしとちを働ハ働きて衣
食住の品物を得るとにハ又これを用うふ當り心得違へり
べわしき人或ハ力を盡して働くも益とも無益ハ錢を費そ
ふと甚どけり唯不精をもちハ勝るといふをりり不
て他よりはことハ或ハ又人並の骨折れも為さを得る
所ハ少ふくして費を用ハ慢ある者り斯く人物ハ忽ち其
身代を破り憚むくき有種ハ臨ること疑も何とを故ハ我身
代をよく保たんとする者ハ得る所のものを不とく用ひ
て盡くこま費をせりり追々年の積りハ従ひ身体も衰

へ仕事をもつことも叶てざるに至るべく或ハ病氣其外不時
の災難も伺ふるも其時ホキ一拭も不自由なきやう多
少の時をなす運くべし假令ひとの働いて得る所のものハ
少ふくとも少ふきハ不き不きしてサーブくの用意を
せざる可らむ

假令ひ我身の富むと雖ども金を費そハ其費そんき事
不
た良否ハ心を用ひさうをりしを愚かる遊小金を用ひ
き儉小錢を費そハ徒小金錢を海へ棄つより尚かとも
動ぶて其以前小力を盡したる骨折ハ我身小用を為さ
世界の為みも益を為さむ空しく水の泡小等しきの又人

の喰ふべき品物用のさき道具も其自方小不用ありとて
らも紙取乗こねを毀つ辱らるる何品小よき餘るものハ
らハ譯もあくこもを費をより難波ふる者へ與ふるを
の本意本も必を心得違ひを命らるるを

① 蟻と蠶の事

秋過ぎ冬も多や米の蟻の仲間ハ忙しく雨露ホきせむ穀
物を住居の傍に取へて小山の如く積貯へ寒さの用意事
一と共不動其折折憂の終小生殘も一疋の蠶蠶吐寒小
堪へぬね半死半生の様小て蟻の家小米見苦しくも脚を
履めて君の家小貯へたる小麥小又も大麥小も唯一粒を

惠心らの難法を執ひ給へと請願ありて一足の蟻とを結
る間には中々憂ひ憂ひの間に幸抱けて長裾を斬りて小若小
於るや更亦其用意を巧むを長き夏中の其間は何事小日を
送らむとやとて華小蟲並も赤面すこと其事あり夏の間
唯面白く月日を送て朝小露を飲み夕暮の月小歌い花
小戯と華小舞の冬に来らんとはゆめく考へさうりありし
茶を小蟻の云々君の言葉に聞て小衆小別小云ふべきこ
ともあり誰小もは夏の間小歌舞飲食をる者小冬小至り
と欲死ぬべき苦ありしと
③ 庶民の久倫約をる事

身小重き尊位豪傑の君子も儉約せしむて名高きもの
と雖も在位山王の粗服を著すものの様小身の家来小異あり
又羅馬合衆政治の大統領かとうの上者一枚を調ふ小百
文と定りて一枚一か余とありて事多し貴世しこと高し半生
へ小吉と云ふ不用の物を買へば其價へ何程おとも高き也
のありと又羅馬の帝が衣をもつを凡そ其時代の世帯中
を押領せし君もととも其着せむ衣服ハ皇后と姫君もあて
縫ひしものあり其便具蒲團杯も平人の用ゆる品小異あり
と又日昇曼の帝もとふに常小粗服を著て見若しき小と
か様多し或時を人を焼く店小在寄りて大木小ゆりけを店

四十二

の女にき後見知事を賤し奉りあがりして大の悪しう違神以
 してと所をとり又るも其の末孫第五世為やれをもも
 中受の帝に西班番直西位をも兼ね威名耀々君ありし
 の常和親王と著せり又佛蘭西の王第十一世云はもちや
 所を同様小衣服を奢りてことあり其孫向の書類を見
 ず不吉き下番の袖を取替りたりと云る下番を十一
 十の袖を三度半の長物を空の袖を買ひ
 しての袖と云り右の何れも世に名高き國王にして其一身
 の為王費を賄ふ賤く儉約ふとて其國の爲と云は幾十萬
 の大金と費とも懼ふと云ふを其英雄あり

② 質素儉約なる家内の事

子供たゞ若く何品おでもよくて其始末もよく勿論お
 せども唯自分の爲の事を思ふてハ自儘勝手の舉動の節を
 少人の爲を考へて物を始末もよく我府持の品を
 友達へおち與ふかハよほどとあるも益をなくとも或打
 碎くハ甚き宜しかりを余非て或人の家に至てハ其家風
 如何をも儉約の法お叶ひぬると見苦しく賤しき趣ハ露
 なくせり何れも唯眞實の儉約を守り少く少く亦以
 て其家風の一ニ箇条を擧てつらんお家の人外より紙包

芋のくしお米の土地にてハ二俵の價半兩あり八十斤入の
 俵ふとこ二俵合せて百六十斤の芋ありこを洗ひこも洗
 煮ふし地土薬たきとちもゆきけをすも荒介一俵半お
 て一人一日の食物ふハ十分あり此割合おもきハ半兩の金
 を以て一七日の間九人を養ふハ一圓より半より日を食お
 用ハ蕃の粗末ある者ふもこれ不備なるもの塩を付
 或ハだたを取たる牛の乳の残て汁を多くて平日の食不用
 三ハ田舎ふ珍らしめゆぬことおて期ハ難波者ハ幾千萬人
 もゆくとく
 桑の家ハ近處なる小屋お住へる者共ハ一七日の間ハ一度

六丈のむんを一個づつ興へふハ難有こも依受け其子供等
 の為おハ大造ふる馳走してこも依悦おへりさしハ今半兩
 の金ゆをハ一七日毎ハ五軒の難波者へ幸福を敷ハ一むぐ
 一兩と定む
 田舎おて大勢の家内の住居せる小屋ハ一年の家賃大抵四
 十おとてんぐより多かふをさきハ今一七日ハ半兩づつ
 金ゆをハ一平の間三軒の家賃を拂ひ一上お家を修覆して
 も尚ゆきよりゆくとく

田舎ゆ小村おゆる女師匠の塾おて學問をるおハ其費一七
 日ハ二文より多かふをさきハ今半兩の金ゆをハ一七日の

間十五人の子供素讀の稽古をせしめ或ハ十五人の女の
 子不違物の稽古をせしむく右ハ必也田舎不限るもは
 らを都會の地おても一季三箇月の間一兩の金を拂へば
 讀し書き算用の教を受け世間並の人物はハあふく故
 一七日ハ半兩の金おとバ三箇月の間六人の子供を教て其
 上ハ書物とも調へ與ふ處あり
 右ハ一七日の間ハ半兩の金を以て他人の爲ハ大なる功徳
 を爲るべき仕方あり今又この金を以て汝が身の爲ふるを
 べき仕方を示さく
 余が知る如く汝ハ幼少の時より禽獸草木の彩色繪と悦

べしこハおちうらるはもとより天然の物を調へ學問の
 爲ハハ入用ふるものあり斯く繪人の書物ハ毎月出版する
 中ハ一七日ハ半兩の金おとバ極上の品を買取ること容易
 あり
 又一七日ハ半兩づくの金をろんとんの書林ハ入置かば一
 年の間ハ様々の書物を得て五年の月日を費しても
 讀めり程の冊數あり
 右の次第おて余ハ半兩の金を愛て汝ハ興へざるハ何
 ぞともし前お云へる如く半兩の金おとバ汝の爲ハ又他
 人の爲ハ夥多し益を爲ることあるものあり故ハ今汝

